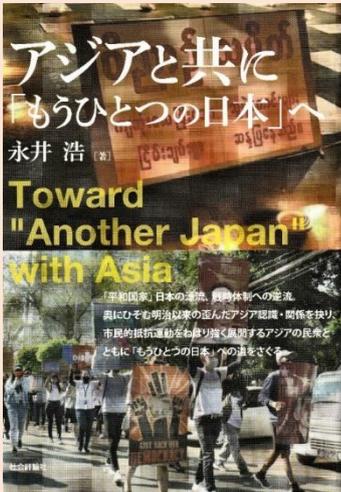


「事務局たより」号外 2021 年 9 月 3 日 北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会・事務局 福島 清



永井浩さん（元毎日新聞外信部記者）の『クーデターと私たち～ミャンマー民主化運動伴走記』をこれまで 10 回、連載してきましたが、ミャンマーに続いてアフガニスタンも激動しています。アジアが激動する中で、永井さんが『アジアと共に「もうひとつの日本へ』』を刊行しました。そこで「クーデターと私たち」を改題して、永井さんの著書名をお借りして、「アジアと共に—もうひとつの日本へ」として連載を継続することにします。改題通算第 11 号は、2 人の永井著書評につづけて、アフガン問題です。

ポツダム宣言第 12 項は「前記諸目的が達成せられかつ日本国国民の自由においてに表明せる意思に従い平和的傾向を有しかつ責任ある政府が樹立せらるるにおいては連合国の占領軍はただちに日本国より撤収せらるべし」となっています。ところがポツダム宣言受諾から 76 年後の現在、日本にはアメリカの軍隊

が大手を振って存在しています。いや占領しています。ということは、日本にはまだ「責任ある政府が樹立されていない」ということになります。こんな現状をいつまで続けていくのでしょうか。「アジアと共に」の視点から考えていきたいと考えます。ご意見をお寄せください。（事務局・福島 清）

【東京新聞書評（8 月 14 日）】

「米国に偏らぬ世界認識を」

古関彰一・獨協大名誉教授

われわれは「平利国家」を掲げて、敗戦後を通じてきたが、かつての戦争を脱却できていないなかで、あらたな戦争が徐々に準備される時代を迎えている。

著者は、毎日新聞でバンコク特派員としてアジアを肌で感じ、その後は大学に移り、アジアと日本を民衆の視点で研究してきた。そのような著者から日本を見るとアジアとの落差の大きさを教えられる。

インドネシアの辞書に、戦前の日本軍に働かされた「ロームシャ」（労務者）という言葉が入っていることを知る人は少ない。しかもそれは戦前の体験によるばかりか、戦後も「ロームシャ」という映画を上映することが日本の経済進出に悪影響だとして禁じられたという。これぞまさに日本の「サーベルから、札束へ」を象徴している。

アジアの日本への眼差しは、かつての経済進出から軍事力の行使へと変わりつつあるという。エジブ

トのイスラム法学者は、かつて日本は、イスラム諸国で尊敬されてきたが、自衛隊が米国のアフガン攻撃の後方支援となったことにより「欧米とイスラムの仲介の資格を失った」とみている。「かつて聖戦、いま国際貢献」と戦争の正当化は不変だと著者の指摘は鋭い。

だが、日本近代の歴史を繙いてみれば、アジアの民と生きてきた日本の先人もいる。著者はその例として三人の先人を挙げる。中国の革命家孫文を献身的に支援した宮崎滔天、在日朝鮮人の恋人朴烈とともに死を恐れなかったアナキスト金子文子、「アジア文化会館」のために尽力し、「留学生の父」と慕われた穂積五一である。

時代を下れば、毎日新聞の記者・大森実のベトナム報道。さらには、ベトナム戦争に派兵された韓国軍の、戦場での虐殺行為を、三十年後に調査報道し、ベトナム国民へ謝罪キャンペーンを行ったハンギョシ新聞の記者たちの勇気。

こうした「米国に偏らないグローバルな世界認識」をもって、アジアの友と「おなじ人間としての目と心」で、「もうひとつの日本」を目指そうと著者は

呼びかけている。

【日刊ベリタ書評（8月27日）】

市民社会のつながり拡大に可能性

杉本良夫・豪州ラトロップ大学・名誉教授

あるべきアジア報道とは何か。本書はこの問題を一貫して追求してきた筆者による着地点である。『される側から見た「援助」』から『戦争報道論』まで、数冊に上る筆者の連作の延長線上に、本書は書かれた。

この主題に関する日本の主流ジャーナリズムについての分析は、余人を持って代えがたい。大手メディアが、どれだけ「アジアの民衆」から目をそらしてきたか。日本の支配層に染みこんだ「アジア観」に取り込まれているか。現場からの報道を怠ってきたか。本書でも筆者はこうした問題を具体的な事例を次々に挙げて、説得的な考察を繰り返す。このような批判的な吟味の内容は、筆者が半世紀近く全国紙の内部に身を置いて、アジアに関するニュースに関わってきたからこそ可能になった側面があり、本書のメディア分析は筆者の職業的実力に支えられている。

アジア報道についてのこうした論考の積み上げの上に、この本はまなざしの対象を市民社会に広げる。とりわけ感銘深いのは、アジア各地に根づく市民的抵抗運動に共感しつつ、独自の貢献をした日本人びとの仕事を詳説している点だ。宮崎滔天、金子文子、穂積五一、大森実、中村哲など、多様な分野でアジアの市

民と関わった人たちの軌跡が、やさしい言葉と例証と共に描かれる。これらの人びとの活動は、福沢諭吉の「脱亜入欧」の思想以来、日本社会に綿々として受け継がれてきたアジア蔑視の感情と立ち向かい、「もうひとつの日本」を構築するための導きの糸となっている。

本書は各所で日本社会の平和主義や革新思想が唱えるインターナショナリズムが、ほぼ無意識にナショナリズムを内包している危険について、繰り返し述べている。「平和憲法を守れ」という呼び声は、国際主義を推し進める運動である側面を持つ一方、自国第一主義の轍に落ちる危うさを持つ。自分たちだけが安全でいらればよいという日本の一國平和主義の逆説から筆者は目を離さない。普遍主義的な憲法9条を持ちながら、自衛隊の軍備拡張、ベトナムやイラクでの戦争への介入、先の戦争への反省の欠如といった好戦的な方向に傾斜していく日本の現状は、アジアの人たちには偏狭なナショナリズムとして投影する。この状況を描く論者の筆致は、極めて説得的である。

このような落とし穴にはまらないために、筆者のいう「蟻の目」、「普通の人」の目線、日常生活者の視点から、アジアと日本の市民社会のつながりを拓いていくことに、本書は将来の可能性を見る。西太平洋での米中対立、ミャンマー情勢の深刻化、香港での衝突、アフガニスタン状況の急変化などが耳目を集めるいま、この地域に心を砕く人たちにとって、読み逃さない一書である。

◆2021年8月17日 日刊ベリタ <http://www.nikkanberita.com/read.cgi?id=202108171343102>

タリバンの復権 日本は「対テロ」で 自衛隊が米軍を支援した事実を忘れてはならない

永井 浩

アフガニスタンのタリバンが15日、首都カブールを制圧、政権を掌握した。2001年に米国のブッシュ政権による「対テロ」戦争で権力の座を追われてから、20年ぶりの復権である。この大ニュースは、日本とも無関係ではない。小泉政権はタリバン打倒をめざす米国をいち早く支持し、

「国際貢献」と日米同盟の旗印のもと、アフガンを空爆する米軍を後方支援するために、海上自衛隊をインド洋に派兵した。戦後初めての「戦時」の外国領域への自衛隊派兵を突破口に、事実上の集団的自衛権行使の道が開かれ、日本は「平和国家」から、戦争のできる「普通の国」へと大きく

変貌していった。

▽中村哲医師「戦争加担に反対」

小泉政権が海上自衛隊をインド洋に派遣するテロ対策特別措置法案を国会に上程したとき、N G O「ペシャワール会」の現地代表で医師の中村哲は、法案審議に参考人に呼ばれて意見を述べた。彼はアフガンの現状を説明し、「空爆はテロと同レベルの報復行為。自衛隊派遣は有害無益」と同法案に反対した。

タリバン政権の誕生以前からアフガンの大地に足を据え、この国の実情をもっとも深く理解する日本人として、彼は同国が大干ばつに直面していることをしている。「それに武力攻撃を加えるということは、アフガンの人びとにしてみれば、天災に人災が加わるということです。報復は、歴史に汚点を残す空前のホロコーストになる恐れがあります」。だから、「日本がしなければならないのは、難民を作り出す戦争への加担ではなく、新たな難民を作り出さないための努力」であり、「日本が大きな曲がり角にいるからこそ、国民の生命を守るという見地から、あらゆる殺りく行為への協力を反対します」とうったえた。

中村は、医師としてパキスタン、次いでアフガニスタンの診療所で貧しい人たちのための医療活動に取り組んでいた。だが人の命を救うためには、まず健康な身体づくりが先決ではないかと考えるようになった。そこではじめたのが、1979年のソ連の軍事介入以来長い戦乱で荒廃したアフガンの農業復興だった。現地の人びとと共に汗を流しながら、大河クナル川から引いた27キロにおよぶ水路を完成させ、65万人に小麦畑や農場をよみがえらせた。

中村が自衛隊派兵に反対するのは、それだけが理由ではない。彼によれば、アフガニスタンの人びとは親日的である。その理由は、日露戦争での日本の勝利とヒロシマ、ナガサキの被爆にある。英国と同様にアフガン征服をねらうロシアは日露戦争での敗北で野望を放棄せざるをえなくな

った。広島、長崎を原爆の実験場とした非道な米国への反発と、その犠牲となった日本への同情もある。タリバンを含めて対日感情はきわめていい。

そうした伝統的な親日感情が、ペシャワール会のさまざまな活動を支えてきてくれた。ところが、日本はいま、米国の空爆を支持し、自衛隊をインド洋上に派遣することによって、「つくらなくてもいい敵をつくろう」としている。アフガンの人びとから見れば、自分たちに爆弾を落とす米軍機はインド洋に浮かぶ自衛隊の艦艇から補給された油で動いている可能性がある。

▽タリバンの実像

だが日本では、タリバンはイスラム原理主義によって自由と人権、とりわけ女性を抑圧し、異教を排除する「悪」のイメージが流布していた。また、米国で同年に起きた「9・11」同時多発テロの首謀者である国際テロ組織アルカイダの指導者ウサマ・ビンラディンを国内に匿っていることから、アフガンはテロの温床とされた。そのような政権を打倒する米国の対テロ戦争は「正義の戦争」とされた。メディアもそのような見方から、小泉政権の自衛隊による「国際貢献」を支持した。

中村はそうした日本の世論になにか作為的なものさへ感じ、自分がしるアフガンの姿を滞日中の講演などで日本人びとに伝えようとした。

中村がみるタリバンの実像とは、「やや国粹的な田舎者の政権」である。なかには荒唐無稽な布令もあるが、昔から農村で守られてきた慣習法をそのまま採用した。欧米では女性の人権侵害の象徴と糾弾されるブルカ着用も、ほとんどの農村の一種の女性の外出着で、普通の女性はかならず着用している。また、欧米からみれば保守的な社会を底辺でしっかりと支えているのは、こうした女性たちだという。彼女たちは、アフガンの基本的な掟である復讐法にも忠実である。夫を殺された妻は、自分の子どもを復讐要員として使う。小さいときから、「あなたは仇をとるために生まれてきたんだ」と言い聞かせる。

ソ連軍が精鋭10万人をもってしても統制でき

なかった広大なアフガニスタン、装備も貧弱な
わずか1万5千人のタリバン兵がわずかな時間
で90パーセントも統治下に置くことができたの
は、彼らが伝統的なシステムを有効に活用できた
からだ。「ジルガ（長老会）」という各地域の自
治勢力が、積極的にタリバンを親分として受け入
れ、治安を守ってくれるかぎりにおいて、タリバ
ンによる統治を支持した。「見捨てられたアフガ
ン民衆の安定と平和への願い」、それが「タリバ
ン現象」を生んだとあってよい、と中村はいう。
しかし、「そういう情報をマスコミは伝えてこな
かったために、タリバン＝悪の権化という単純な
情報操作に世界中の人たちが振り回されてしま
ったのです」

だが中村がこうしたアフガンの実像を伝えよ
うとすると、日本では「おまえはタリバン派だ」
とレッテルを貼られがちだという。しかし、中村
から見れば、逆に欧米の視点のみによってゆがん
だ情報が伝えられ、アフガニスタンについての正
しい理解がなされていないことで、日本が誤った
方向に進もうとしているのが気がかりである。

不幸にも日本は、中村の懸念が的中する方向へ
と突っ走っていく。

タリバン政権が打倒されると、米国は対テロ戦
争のつぎの標的をイラクに定める。フセイン政権
がアルカイダを支援し大量破壊兵器を保持して
いるとのフェイク情報を流して、米英軍は2003
年にイラクに侵攻する。これに呼応して小泉政権
は、イラク復興支援特別措置法を成立させ、「人
道復興支援」の名のもとに陸上自衛隊がイラク南
部のサマワに駐留し、航空自衛隊はクウェートか
らイラクへの陸自隊員や物資などの空輸の任に
あたった。自衛隊の「戦地」派兵は、戦後日本の
安全保障政策の重大変更を意味した。

自衛隊の海外派兵とともに、アフガンの対日感
情に変化が見られるようになった。米軍のイラク
攻撃への反対デモが起きたときには、日章旗が英
米の国旗と並んで焼き捨てられた。このようなこ
とは、親日感情の強いアフガニスタンでは以前は

考えられなかった。米国への協力が話題になるた
びに、中村はペシャワール会の車に描いていた日
の丸を消していった。

米国のアフガン攻撃を日本が支持し、海上自衛
隊をインド洋上に派遣したとき、エジプトで最も
注目を集める若手イスラム法学者、ハーリド・ア
ルジェンド師はこう述べている。「日本は自衛の
ための武力しか持たないのではないか。どうして
自国が攻撃されたわけでもないのに、米軍を支援
するのか。今回のテロ（9・11）で日本人も亡く
なれているといっても、日本人が狙われたわけ
ではない。武力行使を自衛に限る日本の姿勢はイ
スラム諸国から尊敬されてきた。しかし（アフガ
ン攻撃の後方支援により）日本はイスラム教徒へ
の攻撃に加担し、欧米とイスラムの仲介役の資格
を失った」（2001年10月29日付毎日新聞）

2015年に安倍政権が安保法案を強行成立さ
せると、アルジャジーラはじめアラブ世界のアラ
ビア語メディアの多くは、「日本は第二次大戦後
初めて海外の戦闘のために出兵を認める安保法
案を可決」と報じた。

▽新生アフガンには日本国憲法で貢献を

ヒマラヤ山脈をのぞむアフガンの大地から、
「平和国家日本」の変貌を憂慮しながら、中村は
現地報告にこう記した。「日本国憲法は世界に冠
たるものである。それは昔ほど精彩を放ってはい
ないかも知れない。だが国民が真剣にこれを遵守
しようとしたことがあったろうか。日本が人々か
ら尊敬され、光明をもたらす東洋の国であること
が私のひそかな理想でもあった。『平和こそわが
国是』という誇りは私の支えでもあった」。「祖
先と先輩たちが、血と汗を流し、幾多の試行錯誤
を経て獲得した成果を『古くさい非現実的な精神
主義』と嘲笑し、日本の魂を売り渡してはならな
い。戦争以上の努力を傾けて平和を守れ、と言
いたかったのである」（『医者、用水路を拓く』）

中村医師はその精神を、米軍空爆下のアフガ
ンの乾いた大地で、現地の人々と共に灌漑用水と農
業をよみがえらせことで実践しつつけたが、不幸

にして 19 年 12 月、武装勢力の凶弾に斃れた。

もし彼がいまも生きていたならば、タリバンの復権をどのように見るだろう。彼の声が聴けないのは残念だが、ひとつだけはっきりしていると思われることがある。それは、日本がふたたびアフガン情勢について同盟国米国の意向と視点に引きずられずに、いまこそ大国の思惑に翻弄されてきた人びとの悲劇を終わらせるために、政府だけでなく私たち日本人の一人ひとりに何ができる

のか、しなければならないのかを自主的に考えることであろう。そして中村の遺志を継ぐための、私たちの武器となるのは、日本国憲法である。

タリバン新政権が今後どのような政策を打ち出していくのかは不明だが、彼らは米国のアフガン攻撃に日本が加担した事実を忘れてはいないはずだ。だが、武器ではなくシャベルでアフガン再建に貢献してくれる日本なら、歓迎しないわけではないだろう。

2021 年 8 月 22 日 15 : 02 www.nikkanberita.com/read.cgi?id=202108221502020

【アフガニスタン】アメリカの戦争とは何だったのか 谷山 博史

米軍の方が怖かった

アフガニスタンの元スタッフで今は盟友のサビルラから二枚の写真が送られてきました。一枚は彼が昨日タリバーンの新知事を表敬訪問したときの写真。知事室でくつろいだ様子で話をしています。もう一枚は国連アフガニスタンミッション UNAMA の東部地域代表とタリバーンの NGO コミッショナーとの会合の写真。

(写真を皆さんとシェアしたいのですが、さんざん考えてやはりアップするのはやめました。)

サビルラはいち早く知事に渡りをつけ、次に UNAMA を巻き込んで NGO とタリバーンとのダイアログのチャンネルを作ろうとしています。そこで NGO の活動の保障と女性の権利の保証をなんとか認めさせようと動いているのです。

報道では相変わらず過激派タリバーンだの、女性の権利が抑圧されるだのと判で押したようなことしか言いませんが、タリバーンに対する私たちのマインドセットを変えない限り和平もなければ、タリバーンが住民を人質に凶暴化するのを防ぐことも出来ないのです。

私がアフガンで活動していた時、タリバーンよ

り米軍のほうが怖かった。米軍がスタッフの母親を銃撃した時私は米軍に乗り込んで談判しました。そこに若いサビルラがいました。今サビルラは当時の私よりずっと賢明な仕方です。タリバーンと対話しようとしているのです。そしてそんなことが地方の現場ではできているのです。

(2021年8月17日)

アフガニスタンでの報復戦争

アフガニスタンでの対テロ戦争は講和なき戦争でした。有志連合による主要な戦闘が終わった後ボンで締結されたボン協定は、タリバーンを除くアフガニスタンの主要勢力と各国が結んだ協定で、和平協定ではありませんでした。アメリカにとって対テロ戦争はタリバーンの掃討戦争、すなわち根絶やしにする戦争だったのです。スピンガル山脈のトラボラ地域の洞窟に籠るタリバーンを原爆以外で最も殺傷力のあるバンカーバスターやデージーカッター弾などを使って殲滅するなど、凄惨な掃討作戦が繰り返されました。

この掃討作戦が民間人を巻き添えにし被害を広げました。私が滞在していた 2006 年の時点で民間人の犠牲者はタリバーンによる自爆攻撃や簡易爆弾によるものと米軍や NATO 麾下の

ISAF によるものがほぼ拮抗するまでになっていました。タリバーンに対する怒りと同じ程度、いやそれ以上に米軍に対する怒り報復感情がアフガン人の間に生まれていました。この反米感情は農村部で浸透していましたし、公然としたものではなかったのでメディアがカバーすることはありませんでした。

タリバーンの勢力拡大、短時日での主要都市とカブール攻略に皆驚きますが、アフガニスタンの実情を知っている人は米軍が撤退すればこうなることはある程度予想していたはずで、2007年の時点でさえタリバーンの影響力の強い地域は主要都市部を除いて全土の54%に及んでおり、2008年には72%にまで拡大しています（ICOSレポート）。

私がアルガにスタンに入った2002年の頃はアメリカへの反感を口にするアフガン人は稀でしたが、年を追うごとに怒りの声は大きくなっていきました。スタッフの間でさえです。そうれはそうです。スタッフの中で米軍の誤爆、誤射、不法な拘束などの被害をうけた親族がいないものはないと言ってよいほどでしたから。

今回私が一番恐れたのはタリバーンによる報復でした。アメリカは9.11の報復戦争としてこの戦争を始めました。また、和平を選択肢から排除してタリバーンを根絶やしにすることに固執するために戦争がこんなに長引きました。そして最後には逃げ出しました。根絶やしにするという意図のもとに、害虫のように殺されていったタリバーン兵がどれほどいたか想像してみてください。だから私は報復を恐れ、いや今でも恐れています。

しかしカブールを制圧して以降タリバーンは一貫して報復はしないと表明しています。これは私にはとても意外なことで驚きでもあります。国際社会を意識してのことであることは間違いあ

りませんが、タリバーンが報復を原動力として戦ってきたことを考えると俄かには信じがたいものがあります。しかしこれは希望でありチャンスであることもまた間違いありません。今、言論の自由や行動の自由、女性の人権、就業の自由など民主主義社会で保証されるべき自由と人権が失われることを誰もが恐れています。本当に恐ろしいです。しかし今タリバーンに対する報復戦争を容認してきた私たちが一番タリバーンに求めるべきは、報復を自制することなのです。そのためにはタリバーンを孤立化させてはならないのです。

アフガニスタンで書いた詩に当時の状況と私の思いが表れてるので共有することにしました。

聖戦

私たちが殺そうとしている

あなた達と話がしたい

蛇のように獣のように殺されていく

あなた達の憎しみは

ラピス石のように硬く怪しい光を放つ

希望なき戦いは神にのみ近づいていく

もう誰もなだめることはできないのか

果てしない報復の繰り返しのうちに

人の世は潰えていくのか

峨峨たる山と砂漠と緑の溪谷に育まれたこの国には

今憎しみが満ちている

この国を愛するものも

この憎しみを止めることはできないのか

(2021年8月19日)

たにやま・ひろし 沖縄在住 JVC(日本国際ボランティアセンター)前代表